

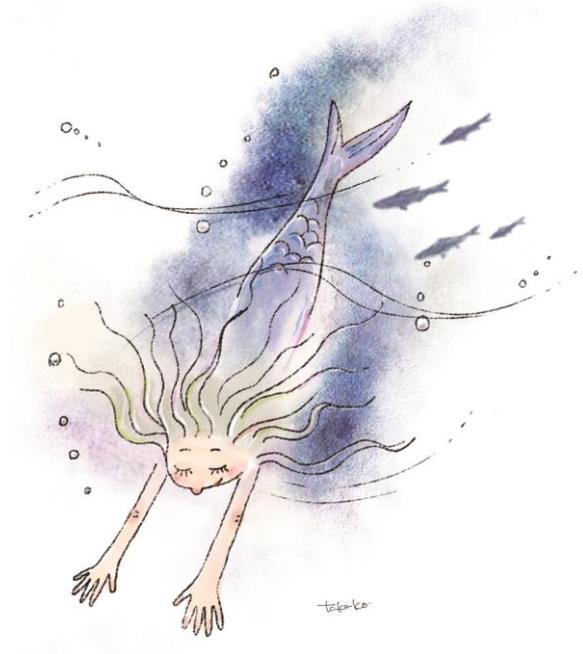
## 「海辺の人」

書いても書いても消えていく  
消したくないのに消えていく

ざーっと出では  
さーっとさらう  
それは波だった

気がつくとき海の中にいた  
いつの間にか魚になっていた  
そうして波と暮らしていた

海中で揺れながら  
気持ちよく泳ぐこともできるのかもしれない



作 佐藤 茜

イラスト 猪原 孝子(つどいに参加のお母さん)

波＝どもり 魚＝吃音を受容した本人 海＝どもりのある暮らし

作者:吃音を一生付き合っていくものと受容した、当事者の気持ちを考えて書いてみました。砂浜に立ち、吃音と対峙していた人が、一度海に入るとどもりと混ざり合って、それを生活の一部として認めることで、心地よく過ごせるのかもしれない、という希望を表現しました。私は当事者ではありません、そのためこの詩を書くにあたって戸惑いがありました。

佐藤隆治:「書いても書いても消えていく」は、砂浜に、指で字を書いている様子なのですが、これは、なおそう・なおそうとして、なおったつもりになった吃音だけれども、そんな淡い期待が、そのたびに消えていく…と、読み取りました。

作者:はい、その通りです。苦しい、もどかしい気持ちです。

佐藤隆:11月の吃音五行詩のレッスンのつどいに合わせて、茜さんが書いてくださった詩を、小学生達が演じてくださいました。如何でしたか？

作者:感想を言ってくれたこと自体が本当に嬉しくて、内容があまり入ってこなかったのが本当のところ…しっかりとは思えないのですが、覚えている範囲では…小学生男子はみんな、私の意図を汲み取ってくれていたようでした。魚と波と海のそれぞれの意味は分かってくれたようです。吃音があっても付き合っていけばいいというような感想でした。でも、気を遣ってくれたかな？という印象もありました。心の中で本当にそういう風に思えるようになるのには、まだ時間がかかるんじゃないかなと思いました。

佐藤隆:私が、初めて、この詩にお目に掛かれた時、たいへんうれしかった。たとえ、吃音経験されてなくとも、私が良く言う、「フツーにどもって、フツーに生きていく(生きていける)」ということ、どもることとの(自然な ありたき)付き合い方…を、ちゃんとして理解してくださっている。

吃音でなくとも、別の人生のテーマ(なかなか受け入れがたい…感じで、えてして、深い悩みの淵をのぞきそうになる。しかし基本的に治らないものなので、付き合う…という考え方に行き着く…)を、お持ちかと思います。入口は違えども、思い測りうる場合はちゃんとあるようです。

作者:吃音は周囲の理解さえあれば普通に生きて行く上で何の障害にもならず、本人が必要以上に苦しむ必要の無くなるものだと思えます。(先輩のSさんの受け売りですが…)だから私も、吃音の方とお話して何気にする部分ありませんし、自分も海の一部でありたいと思ってこんな詩になりました。